

設問 1

同社が成し遂げた工程イノベーションは、どのようなものであったか、アーキテクチャ概念などを用い動的に説明してください。

設問 2

同社の今後の課題は何でしょうか？その課題を認識した上で、どんなビジネスモデルが考えられるでしょうか。

——引用文献——

亀井省吾(2013)「知的障害者活躍現場の工程アーキテクチャ」『情報社会学会誌』
Vol.8, No1.

Kamei, S. et al. (2015) *Social Impact Information as the Cause for the Formation of Ties in Enterprises*, Proceedings of 48th Hawaii International Conference on System Science. IEEE.

小倉昌男(1999)『小倉昌男経営学』日経 BP

小倉昌男(2003)『福祉を変える経営』日経 BP

小倉昌男(2003)『経営はロマンだ！私の履歴書』日本経済新聞

建野友保(2001)『小倉昌男の福祉革命 障害者「月給1万円」からの脱出』小学館文庫

株式会社スワンホームページ <http://www.swanbakery.co.jp>

不 許 複 製

産業技術大学院大学

2016年3月

5.3 平成28年度シラバス

専攻名	創造技術専攻	必修・選択	選択	単位	2	学期	1Q
科目群	創造技術基礎科目群	科目名	ものづくりアーキテクト概論		教員名	専攻全教員及び 客員教授	
		(英文表記)	Introduction to the "monozukuri" Architect				

概要	<p>創造技術専攻が育成する「ものづくりアーキテクト」という人材を理解するために、本学の専任教員やゲストスピーカーがそれぞれの専門分野の立場から、「ものづくりアーキテクト」について言及し、「ものづくりアーキテクト」の実像をうかがいあがらせるようにする。この「ものづくりアーキテクト」の概念としては、「ものづくりスペシャリストたちを組織化し、顧客の潜在的な期待に迫り、感性を駆使して機能を実現する構造を創出し、人々に具現化された新たな価値を提供する」ような能力を持った人材像であり、現在の社会活動の中で強く必要とされているものである。</p>			
目的・狙い	<p>現在、ものづくりに関する社会全体の変化は著しく、専門的な知識や情報も、その範囲を着実に拡大している。そのために、ものづくりに関連する基盤的な知見を広く身に付け、最新の動向についても知識を得ることにより、「ものづくりアーキテクト」となるための素地を各自が作り上げることを目的としている。</p> <p>また、このような領域では、自らの意志によって、それらの社会的変化、知識や情報の拡大に対応すべく、持続的な努力を払う力が必要となっていく。本講義の狙いとしては、知識習得の能力を高め、自発的学習につながることを挙げることになる。</p>			
前提知識 (履修条件)	特になし			
到達目標	上位到達目標			
	「ものづくりアーキテクト」となるための自らの目標を設定し、その目標に向かって学習を進めることができるようになる。			
到達目標	最低到達目標			
	「ものづくりアーキテクト」という人材をイメージできるようになる。			
授業の形態	形態	実施	特徴・留意点	
	録画・対面混合授業	—		
	対面授業	講義（双方向）	○	多方面、多方向に行われる討論や質疑応答
		実習・演習（個人）	—	デスクトップ PC を使った演習
		実習・演習（グループ）	—	
	サテライト開講授業	○	第1回目は、遠隔での受講は不可。 他の回は、基本的に受講可能であるが、各回の講師には事前に遠隔で受講する注意点を確認すること。	
その他	—			
授業外の学習	<p>基本的に、各回の中でレポートの課題が出され、講義後にレポートにまとめることが課せられる。この時、必要に応じて各回の講師から、授業外の学習についての指示が出される。</p>			
授業の内容	<p>本講義では、「ものづくりアーキテクト」にとって必要不可欠であるものづくりに関連する各種の最新事項についての知識を修得する。製品の開発に関する各種のプロジェクト、トレンドや技術革新などの情報、ものづくりを核とした新規ビジネス、国内外政策、さらには本学における PBL 活動などについて、本学の専任教員およびゲストスピーカーが講義する。</p> <p>オムニバス形式の授業であり、講義内容と順序については、第1回目に学生に提示する。また、第1回目には、主に新入生を対象とした自己紹介の時間を取る。</p>			

	回数	内容	サテライト 開講	対面/録画
授業の計画	第1回	総論 各講師が、それぞれのテーマについて基本的に1コマずつ担当していく。 各講師の講義日については、第1回目の「総論」の中で明示する。 下記は昨年度の内容である。 國澤：ものづくりアーキテクト総論（および新入生自己紹介） 村越：ライフデザイン概論 -人生戦略立案と実現に向けて- 前田：グローバル・プロダクション・ネットワークの新時代 橋本：日本型未来産業の動向 小山：デザイン決定プロセスと各段階でのデザイナーの役割と必要能力 青木：日本のデザインの始まりと現状 井上：ものづくりの現場 -横河電機製品	—	対面
	第2回 ～ 第15回	第2回目以降は、各講師が基本的に1コマずつ担当していく。 各講師の講義日については、第1回目の「総論」の中で明示する。	有	対面
	試験	各回の中でレポートなどの課題が出される。	—	対面
成績評価	毎回の講義の中でレポート課題が提示される。レポート課題に対しレポートを作成して、1週間以内に提出することが義務付けられる。 レポートの内容を中心に、総合して評価する。			
教科書・教材	特にテキストは指定しない。必要な資料は講義時に配布する。			
参考図書	必要な資料は講義時に配布する。			
獲得可能なコンピテンシー		獲得可能度合 (◎ ○ △ -)	獲得可能な内容	
メ タ	コミュニケーション	△		
	継続的学修・研究	△		
	チーム活動	△		
コ ア	発想力	△		
	表現力	△		
	設計力	△		
	開発力	△		
	分析力	△		

専攻名	創造技術専攻	必修・選択	選択	単位	2	学期	2Q
科目群	創造技術基礎科目群	科目名 (英文表記)	グローバルコミュニケーション特論 Global Communications			教員名	前田 充浩

概要	<p>国際社会において、国家の利益、企業の利益、個人の影響力等を決定するのは、最終的にはコミュニケーション能力である（東京オリンピック招致成功の重要な要因は、プレゼンテーションであった。またISの力の源泉の1つはネットによる情報発信である。）。一方、今日のグローバル化の進展により、国際社会におけるコミュニケーションの作法は急速に収斂し、「世界標準」が生み出されつつある（「世界標準」を知らない限り、国際社会では「いいこと」を言っても敗北を続け、「負け犬の遠吠え」になる）。</p> <p>本講義では、講義と演習（特にディベート）の組み合わせにより、この「世界標準」のコミュニケーション作法を学び、国際社会における競争の「勝者」となる道を切り開く。</p>							
目的・狙い	<p>「国際社会で通用する人材になるためにコミュニケーション手法を学びましょう」という運動は古来より日本で数多くなされてきたものの、目的が明確ではなかったため、十分な効果を上げる確率は低かった。これに対して本講義では、以下の目的に特化し、そのための実務的なコミュニケーション手法を教授する（すなわち、漠然とした、「世界の人々と仲良くなるため」のコミュニケーション手法ではなく、「勝つため」の方法論である）。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 国家・企業を代表して行う国益を増大するための交渉能力の獲得 2. 情報発信者（Netizen：智民）として世界の人々を説得するための表現能力の獲得 							
前提知識 (履修条件)	国際社会において情報発信をしていく意欲を持つこと。							
到達目標	上位到達目標							
	「エレガントな」論理構成により、国際社会で自らの主張を通す手法を獲得する。 そのための背景となる、情報社会に即した「智」（情報社会学）を体系的に学ぶ。 「勝率の高い」ディベート手法を獲得する。							
	最低到達目標							
	自らの主張を、「世界標準」のコミュニケーション作法によって行う基本的なやり方を理解する。 ディベートの基本的なやり方を理解する。 国際社会の動向を、コミュニケーションの観点から観る視点を獲得する。							
授業の形態	形態		実施	特徴・留意点				
	録画・対面混合授業		—					
	対面授業	講義（双方向）		○				
		実習・演習（個人）		○				
		実習・演習（グループ）		○	グループを組み、与えられた課題のディベートを実践する			
	サテライト開講授業		—					
その他		—						
授業外の学習	毎回、次回の授業に関連する課題を指示するので、事前に作成すること。							
授業の内容	<p>第1部において、グローバル化の進む今日の国際社会におけるコミュニケーションの意味及びその作法のグローバル・スタンダードについて講義する。</p> <p>第2部において、現下及び今後の国際社会の動向を適切に理解するための枠組として、情報社会学の基礎を講義する。</p> <p>第3部において、学習者は、ディベートの実践により、グローバル・スタンダードのコミュニケーションの作法を体得する。</p>							
授業の計画	回数	内容					サテライト開講	対面/録画
	第1回	<p>講義概要</p> <p>講義の目的と15回の学習内容の解説をし、学習者が講義選択の判断ができるようにする。第1回目の内容として、コミュニケーション能力と国際社会の関係について説明する。すなわち、国際社会では、大国は、日々、国際会議等における議論（コミュニケーション）という戦争を行っており、その勝敗で国益が大きく左右されているのである。</p>					—	対面
	第2回	<p>コミュニケーション競争としての冷戦モデル（東西冷戦）</p> <p>国際社会の態様がコミュニケーション能力の優劣によって大きく左右された実例として東西冷戦を取り上げ、そこで行われたコミュニケーション競争を説明する。すなわち東西冷戦は、軍事力（抑止を含む）の競争であったと同時に、コミュニケーション力（外交力）の競争でもあった。</p>					—	対面
	第3回	<p>コミュニケーション競争としての冷戦モデル（新興国封じ込め）</p> <p>国際社会の態様がコミュニケーション能力によって大きく左右された実例として、日本、中国、その他の新興国と incumbent な大国との関係を取り上げ、そこで行われたコミュニケーション競争を説明する。</p>					—	対面